

## 米田知子 “Japanese House” 展覧会評 松井みどり

米田知子は、ある場所に特有の雰囲気やその場に残された痕跡を通じて、その場所の歴史やそこにまつわる個人の記憶を呼び起こす。そのために、その写真表現の手法には、場所の特殊性に応じて異なる工夫が加えられる。

たとえば、ベルリンの壁崩壊以降のハンガリーやエストニアの風景を撮影した写真連作『雪解けのあとで』で、米田は、殺伐とした林や野原や、そこに居合わせる人々を、視線の集中点（フォーカル・ポイント）を省き、前景と遠景の差を曖昧にしたニュートラルな空間として撮った。それによって彼女は、観客に、広い場所にぽつんという感覚や、何かに囲まれている感覚を体感させ、歴史的なたががはずされた場所に存在することの浮遊感を想起させた。また、ハンガリーの、かつてスターリン・シティと呼ばれた町を撮ったシリーズや、北アイルランドに旅して撮影したシリーズでは、同形反復を強調することで、プールの青い水や色タイルが作り出す模様の鮮やかな装飾性や、赤い板の連続による事物の存在感や重量感を伝え、思想的な縛りとは関係なく確かに存在する物の世界に生きることの喜びを感じる人々の心のはずみを観客に共感させた。

2011年10月29日から12月3日まで ShugoArts で開催された個展『Japanese House』では、これまでよりも強く人為性を強調する撮影や現像の方法によって、現代の台北に残る日本の統治時代の日本式家屋に漂う、特異な歴史の痕跡や独特の雰囲気が、意識的に対峙すべきものとして観客に示されていた。シリーズ中のいくつかの写真で、米田は、前景と背景の間の画像の鮮明さに極端な差異をつくることで、絵画表現と写真的表現、「今ここ」の建物と「かつてあったもの」の幻を対比させ、それらが共存する複合的な空間を表出させる。

例えば太平洋戦争終了時の首相、鈴木貫太郎令嬢の家の写真では、柱や玄関の戸の枠の輪郭が強調され、ちょうど絵画の枠組みのような構造を作っていた。それに対して、中景に映し出される部屋や庭の風景は、曇りガラスや薄絹のカーテンに媒介されて、幻のように霞んだはかない輪郭の影のように見えた。両者の対比は、現在の場所の中にある過去の気配を濃厚にさせ、それによって、二つの異なる時空に同時に存在する感覚や、消えていく時間を惜しむ心の動きを観客に追体験させる。家具もまばらな無人の空間に差し込む薄日や、玄関の扉の硝子に書かれた漢詩の賛も、過ぎ去り、戻ることのない歴史上のある時代を引き寄せ、「も

ののあわれ」にも似た感情を呼び起こす。

この、現在の中に潜む過去への眼差しは、事物の淡々とした描写の内に隠された歴史的過去へも、観客の思いを向けさせる。写真によって参照される過去とは、日本の台湾統治によって日本家屋の建築が台湾の上流階級の間にも普及した時代を指している。その典型が、1920-40年代の植民地時代や蒋介石時代だ。それは、確実に、侵略と文化的侵犯の歴史でありながら、文化的交通ももたらした。例えば、家々の隅々に残された日本化されたアールデコ建築様式の痕跡が、植民地化とはただ抑圧的なものなのではなく、異文化の伝播や混交に貢献するものであることを考えさせる。

こうした、一つの空間でありながら、別の時空を宿している一別の時間にとりつかれている一場所の多層性が、今回の写真に撮られた家屋に共通する特徴だ。米田知子の写真は、その場所の二面性を、写真空間の二面性によって体現している。特に、前景と背景を繋ぐ役割を果たすカーテンやガラス戸の、ドライポイントで描かれた油絵やグアッシュの仕上げを思わせる乾いたざらざらしたタッチが、風化の痕跡をなぞると同時に、「絵画化」による時の物象化（現象のイメージへの固定）を強く意識させた。

ひんやりとしたグレーのトーンは、米田の写真の特徴だが、今回のシリーズでは、そのトーンが、時の経過と歴史の経緯のなかで失われて行く文化と生活上の同時代意識（自分がある時代の文化と生活の中に確実に根づいているという意識）への哀悼の感情を高める。

失われて行くものの記録という意味でも、記憶の喚起という意味でも、題材にふさわしい表現が、今回の米田の写真連作でも、高い純度で実行されていた。

（米田知子 “Japanese House”展は 2011 年 10 月 29 日（土） - 12 月 3 日（土）までシュウゴアーツにて開催されました。）